討論の概要

竺沙　知章
（京都教育大学）

油布佐和子先生の講演「対人専門職としての教師」、そして小松茂教授「これからの時代に必要な教師の能力を考える」、水本徳明教授「なぜ教師の仕事は人間関係と感情に負荷がかかるのか」という問題提起の後、油布先生からのコメントを受けて、全体討論に移った。

油布先生のコメントは、これからの教師を育成する上で、教職大学院でどのような力をつけていく必要があるかという問いかけであった。今日のグローバル化した社会の状況を踏まえて、学校における教師の仕事が、どのような意味、影響を持つのかを自覚したうえで、子どもたちにどのような力をつけていくべきなのかについて検討することの重要性を強調され、そうした課題に向き合うことが教職大学院の重要な役割であることを提起された。

以上のような問題提起を受けて、フロアからは、多くの意見、質問が出され、議論を深めることができたように思う。議論になったことを大括りに捉えるとするならば、社会の変化の中で、これからの学校のあり方、教師の仕事についてどのように展望すればよいのか、という点であった。それは、学校の役割の揺らぎ、その中での教師の仕事の複雑化、見通しをもてない不安感による問題提起であったり、ポジティブに捉えるべきだという問いかけであったり、現実に学校において取り組む際の課題に関する問題提起などであった。またそうした問題に対して、開放制の教員養成の中で多様な人材をどのように活かすことができるのか、という教員養成に関わる問題提起もなされた。

こうした問いかけに答えるかたちで、シンポジストからも様々な問題提起がなされた。第一に、社会が変化しても変わらない学校の役割、教師の役割があり、そのことを常に抑えることが必要であること、それは、公正、平等という理念を実現するための社会的装置であるという点に学校の存在意義があることが提起された。第二に、それを前提としつつ、社会の変化を見据え、学校教育が子ども、社会に与える影響を踏まえて、あらためて何のための教育なのか、長期的な視野からその目的、役割を再構築していくことが必要であり、そうした議論は、教職大学院で積み重ねていくべきであることが提起された。第三に、前向きでポジティブに今後を展望するという観点からは、議論をしてみれば、案外面白いこと、前向きな展望を描くことができるのであり、そうした場を設けていくことの必要であること、また授業をするということは、クリエイティブな仕事であり、非常に大事な仕事であるはずで、厳しい状況においてもそのことは実感できるはずであることも提起された。第四に、これからの教師に必要なこととして「社会性」がキーワードの一つになったが、それをどのように育成するか、またそのことが学校をよりよくしていく点でどのように力となりうるのか、ということに関わって、「社会性」を育成しようとすれば、そのものを取り出すということよりも、その重要性が問われる実際の問題など何かを介在させ

ながら、考えさせることの重要性が提起された。教職大学院教育の重要な課題が指摘された。また意図的に育成することはできないということを前提としつつ、同僚ときちんと関係を作りながら、子どもを対象とする感情労働を引き受けることができるように、経験の中で悩むことが必要であるという指摘もなされた。

本シンポジウムでは、将来を見据えながら、教師の仕事とは何か、どのように理解すればよいかということについて、それぞれの立場、観点から考える機会になったと言える。多様な視点から意見が述べられ、豊かな議論が展開された。その議論は、教職大学院の特性をよく反映したものでもあった。実務家教員の小松教授は、長い教職生活の経験に基づき、経験の中で身につけていくべきこと、学校現場で特に求められる力について、特に「社会性」の必要性について積極的な発言を展開していた。これに対して、研究者教員、とりわけ油布先生は、教師の仕事、そこで求められる力について、その認識を見直すこと、その認識そのものを深く問うことを強調していた。また水本教授は、そうした視点を前提としつつ、実際に取り組まれるべき実践についても積極的に問題提起していた。こうした議論は、本研究科の理念すなわち「人間教師を目指して」という理念と「大学院知」を重視する理念につながる。「社会性」は、「人間教師」の重要な要素であろうし、認識を問い、再構築していく議論は、まさに大学院知が問われる問題である。本シンポジウムでの議論を振り返るとき、シンポジストの議論の切り口の違いが浮かび上がってくるのであり、そのことは、あらためて両者の関係を問いなおしていく必要性を投げかけるものと受け止めることができる。これまで本研究科では、両者の関係を深める議論を必ずしも十分に展開してきたとは言えない。本研究科の基本理念は、「大学院知」を通じて「人間教師」として成長していくと理解できるが、あらためてどのような「大学院知」が「人間教師」にとって重要なのか、教職大学院教育を通じて考えていくことが必要であろう。